

日本國天皇家論

6章 日本書紀 持統天皇

近畿天皇家の始まり

太宰府から藤原京へ遷都

草壁皇子への挽歌が人麿によって歌われている。草壁皇子は天武・持統の間に生まれ、壬申の乱に従軍、天武10年、皇太子となり、持統3年(689)年4月13日に没した。歌は皇太子にふさわしく壮大な天皇家の最古の歴史から始まる。果たして草壁皇子の宮はどこに存在したのか。

日並皇子尊の殯宮の時、柿本朝臣人麻呂の作る歌一首 167

天地の 初めの時 ひさかたの 天の河原に 八百万 千万神の 神集ひ 集ひいまして 神分り 分りし
時に 天照らす 日女の尊 天をば 知らしめすと 葦原の 瑞穂の国を 天地の 寄り合ひの極み 知
らしめす 神の命と 天雲の 八重かき別きて 神下し 座(いま)せまつりし 高照らす 日の皇子は 飛
鳥の 淨(きよみ)の宮に 神ながら 太敷きまして すめろきの 敷きます国と 天の原 石門を開き 神
あがり あがり座しぬ 我が王 皇子の命の 天の下 知らしめしせば 春花の 貴からむと 望月の
満しけむと 天の下 四方の人の 大船の 思ひ頼みて 天つ水 仰ぎて待つに いかさまに 思ほしめ
せか つれもなき 真弓の岡に 宮柱 太敷き座し 御殿を 高知りまして 朝ごとに 御言問はさぬ 日
月の 数多くなりぬる そこ故に 皇子の宮人 ゆくへ知らずも

人麿は草壁皇子が天照大神からの系譜を受け継ぐ九州天皇家の正統の王者であると、歌いは始めている。天照大神の宮殿は「高天原(彦島の老の山公園)」にあった。

天岩屋戸を開いて。当時の御陵の構造は羨道の入り口に石の戸があるのでそれらのことを念頭に置いて解すべきであろう。(万葉集・頭注)

「天の原 石門を開き」とは天照大神が隠れた天の岩戸である。人麿は一般的な陵を詠っているのではない。天(彦島)の岩戸を想起しているのである。

草壁皇子の殯の宮は「島」に存在した。

草壁皇子は亡くなった。その殯の宮が作られた真弓の岡とはどこか。通常解釈は奈良である。だが、奈良では、歌に詠まれた情景が大きく、くいちがう。人麿が、「天の原 石門を開き 神あがり あがり座しぬ」と、詠うように、草壁皇子は「天」で亡くなったのである。「天」とは奈良ではない。

「つれもなき 真弓の岡に 宮柱 太敷き座し 御殿を 高知りまして」……ゆかりもない「真弓の岡」に殯の宮をお作りになって。草壁皇子の殯の宮は、「真弓の岡」にあった。ではこの「真弓の岡」とはどこか。通説は「奈良県高市郡明日香村真弓」である。万葉集は幸い、「皇子尊の宮の舎人ら働しば傷みて作る歌」を二十三首も掲載している。その中からいくつか、ヒントとなる歌を取り上げてみよう。

171 高光る わが日の皇子の 萬代に 國知らさまし 嶋の宮はも

172 島の宮 上の池なる 放ち鳥 荒びな行きそ 君まさずとも
 173 高光る わが日の皇子の いましせば 島の御門は 荒れずあらましを
 174 外に見し 檀の岡も 君座せば 常つ御門と 侍宿するかも
 178 み立たしの 島を見る時 にはたづみ 流るる涙 止めぞかねつる
 179 橋の 嶋の宮には 飽かぬかも 佐田の岡辺に 侍宿しに行く
 180 み立たしに 島をも家と 住む鳥も 荒びな行きそ 年かはるまで
 181 み立たしの 島の荒磯 を今見れば 生ひざりし草 生ひにけるかも
 185 水伝ふ 磯の浦廻の 岩つつじ 茂く咲く道を またも見むかも
 187 つれもなき 佐田の岡辺に 帰り居ば 島の御階に 誰れか住まはむ
 189 朝日照る 島の御門に おぼしく 人音もせねば まうら悲しも
 191 けころもを 春冬設けて 幸しし 宇陀の大野は 思ほえむかも
 193 はたこらが 夜昼と言はず 行く路を われはことごと 宮道にぞする

これらの歌に共通する歌詞に「島の宮」・「島の御門」・「み立たしの島」・「橋の島」・「島の御階」がある。これらの言葉のイメージは島である。島と云っても、普通の意味で、海に囲まれている島である。とても、内陸部に存在する、「元は海に囲まれた島」のイメージではない。文学大系萬葉集・頭注は「奈良県高市郡明日香村島ノ庄」とするが、次のような歌詞をどう理解するか。

178 み立たしの島の荒磯……………荒磯は波の荒い磯
 185 水伝ふ磯の浦廻の岩つつじ……………浦廻はみぎわの湾曲したところ

奈良明日香島ノ庄には、波の押し寄せる荒磯はない。島の庄に「水伝ふ磯」はない。明日香島ノ庄は舎人の歌と合わない。舎人が詠ったのは通常の島、海に囲まれた島である。では、いかなる島なのか。幸い、この島の名前を詠った歌が一首ある。

179 橋の 嶋の宮には 飽かぬかも 佐田の岡辺に 侍宿しに行く

島の名は「橋の島」という。「橋の嶋」とは九州天皇家では有名な島の名前である。この「橋の島」を詠った歌が、伊予風土記にある。

風土記 逸文 伊予國 神功皇后御歌

橋の 島にし居れば 河遠み 曝さで縫ひし 吾が下衣

(橋の島にいたので河が遠い。河の水にさらさないで下着を縫ってしまったよ。)

作歌者は神功皇后である。同じ歌が万葉集巻7・1315にあるが、こちらには作歌者名はない。「伊予風土記」では神功皇后の歌とされている。「橋の島」の歌が、「伊予風土記」におさめられていることが、場所特定の決め手となる。この「伊予」とは近畿天皇家の愛媛県伊予ではない。「伊予」とは九州天皇家の「伊予」である。

伊予國風土記の伊予は、「國生み」に登場する「伊予」で、彦島老町である。九州天皇家の伊予國で「橋」と云えば、彦島老の山である。「橋」とは美称で、本来は「立ち鼻」であろう。彦島老の山は、まさしく「人の鼻」の形をしている。

老の山公園は、もちろん現在は、嶋ではないが、老の山公園が、古来、「橋の嶋」と呼ばれてきた島である。神功の歌の如く、確かに、ここには、近くに川がない。

神功は、彦島・老の山でこの歌を詠った。なぜか。神功はここに旅して来て詠ったのではない。彦島は天照大神が治めた「高天原」が存在した九州天皇家の聖地である。ここには、古来、九州天皇家の宮が存在した。神功皇后の夫、仲哀天皇の宮は彦島の「豊浦」にあった。仲哀夫妻は彦島に住んでいたのである。彦島八幡は仲哀天皇を祀る。仲哀も神功も天武も草壁皇子もこの伝統の宮に居た。そして草壁皇子が亡くなった時、その殯の宮を、「橋の嶋」の「真弓の岡」に設けたのである。

「はたこ」は機子

193 はたこらが夜昼と言はず行く路をわれはことごと宮道にぞする

「はたこ」とは「機子」であろう。彼女らは布を織っていたのである。天皇家が着る衣の布は天皇家によって織られていたのは当然である。その職工を詠った歌が193番である。機子たちは昼夜を問わず布を織っていた。「畠子(頭注)」という理解では意味をなさない。農夫が夜に畠仕事をすることはない。神功皇后は、「曝さで縫ひし吾が下衣」と詠ったが、その布を織ったのが、「はたこ」という訳である。

「宇陀の大野」は小倉南区・長野

191 けころもを春冬設けて幸し宇陀の大野は思ほえむかも

歌に「宇陀の大野」が詠われている。この「宇陀」は神武記に登場する。神武が進出したのは小倉南区であった。そこには「熊氏」が支配する「縣」が存在した。「宇陀」もその一つである。日本書紀は「菟田縣」という行政区名で記録している。「菟田(宇陀)」とは現在の小倉南区・長野である。長野を流れる川が大野川で、この川の名前に「宇陀の大野」の名前が残る。「宇陀の大野」は小倉南区・長野である。

草壁皇子はそこへ狩に行っていたことを詠ったものである。小倉南区長野には、九州天皇家の大宮、「大津の宮」が存在した。草壁皇子は大津の宮から「宇陀の大野」に狩りに出かけていたのである。

草壁皇子は彦島の「橘の嶋宮」に居た



彦島老町・貴布祢神社

彦島・老の山は古代から「橘の嶋」と呼ばれてきた。「黄泉」から逃げ帰ったイザナギが、ミソギをした地は「竺紫日向之橘小門之阿波岐原」と日本書紀は書いている。この地名にも「橘」がある。「小門」とは彦島・小戸をいう。「橘」とは「立ち鼻」という地形を表す、彦島老の山である。イザナギから神功皇后に至るまで九州天皇家で「橘」とは一貫して彦島・老の山である。

ここは九州天皇家の聖地であった。「高天原」とは、この島の存在した高地弥生集落である。天照大神以来

天武までの九州天皇家の王宮が存在した。それが「橘の島の宮」である。神功皇后も天武天皇も草壁皇子も、この宮に居た。

天武が日本國天皇天智の病氣回復を願って、耳我の嶺に登る前夜に帰った、「嶋宮」とは、この彦島の宮である。現在、この宮の遺構が残っているかどうか、不明であるが、彦島老町に貴布弥神社がある。大正時代には大変栄えたお宮で、その祭日には、全国から力自慢が集まって相撲をとったと云われる。

この宮が「橘の宮」に最もふさわしい。



持統、太宰府を去る

持統3年(689)年、4月13日に草壁皇子が亡くなった。6月24日、持統天皇は「筑紫」で接待している。むしろ、持統自身が接待したのである。

・持統3年(689)6月24日に、筑紫の小郡にして、新羅の弔使金道那等に設(あ)えたまふ。
物賜ふこと各差有り。

この時、持統は、まだ、筑紫にいた。もし、草壁皇子の殯の宮が、通説のように、奈良・明日香・島の庄であるとすれば、新羅の弔使を筑紫で「設えたまふ」ことはない。もし、持統が明日香にいたのであれば、「設えたまふ」場所は、大阪難波の迎賓館か、奈良の宮である。

草壁皇子は北九州に居た。そして、689年4月に亡くなった。新羅からの弔使は「筑紫」にやってきた。その

弔使を持統は「筑紫・小郡」で慰労したのである。すべて北九州が舞台である。天武は壬申の乱に勝利して日本國天皇家を滅ぼし、天皇となった。その後、天武は太宰府を政治の拠点としていた。持統の筑紫記事は草壁皇子の死去以降、見あたらない。そして、持統4年は次の記事となる。

・持統4年3月20日に、京と畿内との人の、年80より以上なる者に、嶋宮の稻、人ごとに二十束賜ふ。

この「嶋宮」とは、草壁皇子の挽歌に詠われた「橘の嶋宮」である。「嶋宮」に蓄えていた稻を、京と畿内の80歳以上の老人に配った。「京」と「畿内」と併記されている。「京」とは藤原京である。「畿内」とは近畿である。

この記事の意味する所もまた明らかある。持統は最愛の息子を失ってしまった。もはや、「嶋の宮」は要らない。「嶋宮」を廃し、蓄えていた稻を放出して、九州天皇家の地を離れ、日本國の京、藤原京に遷る決意をしたのである。